藝術学関連学会連合 第13回 公開シンポジウム

藝術と教養

－藝術は教養たりえるのか？－

2018年

6月2日(土)13:00～17:00 慶應義塾大学 日吉キャンパス

来往舎シンポジウムスペース

（〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1）

【開会】13:00

《開会挨拶》山﨑稔惠（藝術学関連学会連合副会長・服飾美学会・関東学院大学教授）

《趣旨説明・司会》永田靖（日本演劇学会・大阪大学教授）｜小林昭世（日本デザイン学会・武蔵野美術大学教授）｜小菅隼人（日本演劇学会・慶應義塾大学教養研究センター所長・教授）

【研究発表】13:15～

塚田章（意匠学会・京都市立芸術大学教授）「インダストリアル・デザインと教養」

山下純照（日本演劇学会・成城大学教授）「教養の変貌ー現代演劇における」

山口遙子（美学会・東京藝術大学専門研究員）「芸術を教養として学ぶこと ー1760～1770年代の『愛好家向け』アルファベット式芸術事典に即して」

佐藤康宏（美術史学会・東京大学教授）「知識人の絵画ー南画とその享受者」

【討論】15:20～

富田直秀（日本デザイン学会・医師・京都大学教授）｜青木孝夫（広島芸術学会・広島大学教授）

【クロージング】17:00

《閉会挨拶》藤田治彦（藝術学関連学会連合次期会長・意匠学会・大阪大学名誉教授）

主催：藝術学関連学会連合 http://geiren.org｜共催：慶應義塾大学教養研究センター

藝術学関連学会連合第13回公開シンポジウム

藝術と教養

藝術は教養たりえるのか？

「イギリス批評の父」と呼ばれるジョン・ドライデンは、イギリスにおける本格的な演劇論の嚆矢となる『劇詩論』（1667）を著し、古代作家と現代作家、英仏演劇の比較、エリザベス朝演劇と王政復古期演劇の比較、演劇における規則の是非、劇の文体の優劣など、その当時の演劇界の重要トピックスを、四人の人物の対話形式で論じました。議論が白熱する中で、四人のうちの一人、リジディアスが、“劇がどのようなものであるべきかを知らなければ、誰が最高の劇を書いたかを論じるのは不可能だろう”と発言します。リジディアスがそう言うや否や、他の三人は、“それでは演劇の定義を教えてくれ”と彼に懇願します。そこでリジディアスは、演劇とは「人間性の正確で生き生きとしたイメージであり、人間のパッションとヒューモア、人間の従属する運命の変転を描いて、人間を楽しませながら教え導くもの（for the delight and instruction of mankind）」と述べます。

ドライデンに限らず、また演劇に限らず、藝術の目的が“楽しませるものでありつつ人間性を高めるもの”とする言説は、古今東西に繰り返し唱えられてきた藝術理念の一つであることは言うまでもありません。その根底にあるのは、藝術は心地よいものでありながら豊かな人間性を涵養するために役に立つもの、言い換えれば、藝術は娯楽であると同時に「教養」であるべきだという確信です。そして、藝術は、人間性を養うものという意味での「教養」として、人々にとってなくてはならないものということになります。

しかし現代のグローバリゼーションが進行する世界を見渡すと、国や地域によって求められる教養も様々であり、全世界に遍く共有できるような教養を考えるのが困難になっています。今日では、教養そのものの定義やあり方を根本的に議論しなおすべきときに来ているのではないでしょうか。現代求められている教養とはどのようなものか？ そもそも藝術は教養となりうるのか？ 藝術が教養の一部になるとすれば、教養としての藝術とはどのようなものを言うのか？ また藝術的教養は人間にとって本当に必要なのか？ かつて全財産を奪われ監禁された南アフリカの政治犯は、音楽、美術、演劇、文学などの教養（Humanities）が、人間にとって不可欠なものであり、「食べ物よりも重要だったことを確信した」と発言した（デイヴィッド・シャルクウィックによるIFTR国際演劇学会での基調講演、ウォリック大学、2014年）ことを考えても、教養は必要であることは言うまでもありませんが、そのあり方や見方については今一度再考が求められているのだと思います。

これは大きな問題ですが、藝術研究を進める私たちにとってのみならず、広く一般社会の関心も惹くことでしょう。今回はこの問題について藝術の多領域から総合的に考え、藝術の存在意義を「教養」という文脈において考えたいと思います。

塚田章（意匠学会・京都市立芸術大学教授）
「インダストリアル・デザインと教養」

インダストリアル・デザインを実践する中で不可欠な“教養”とは何か。高度経済成長期の 60 年代にインダストリアル・デザインを学んだデザイナーに求められた“教養”と、今日求められる“教養”は大きく変化している。しかし芸術の性質を理解する事はデザイナーにとって重要なテーマでありそこは変わっていない。芸術の価値を理解し評価し得る“教養”或いは、表現・創造し得る“教養”は不可欠である。インダストリアル・デザインに関わる“教養”の不易流行を創る側の立場から掘り下げる。

山口遙子（美学会・東京藝術大学専門研究員）
「芸術を教養として学ぶこと ― 1760～1770年代の『愛好家向け』アルファベット式芸術事典に即して」

ゴットシェートとズルツァーは、ドイツで最も早くアルファベット式芸術事典を著しました。アルファベット式事典によっては「真の学識」は身につかない、というアカデミズムにおける根強い反感は一八世紀末に至るまで見られますが、その中で両者は共に、学識者も民衆も一種の「愛好家」として広い教養を身につけるべきとの視点に立ち、芸術の発展のために「愛好家向け」「アルファベット式」芸術事典の必要性を強調します。本発表では、ドイツ最初期の二つの芸術事典とそれに対する同時代の批評を通じて、芸術を教養として学ぶ方法論について考えます。

山下純照（日本演劇学会・成城大学教授）
「教養の変貌ー現代演劇における」

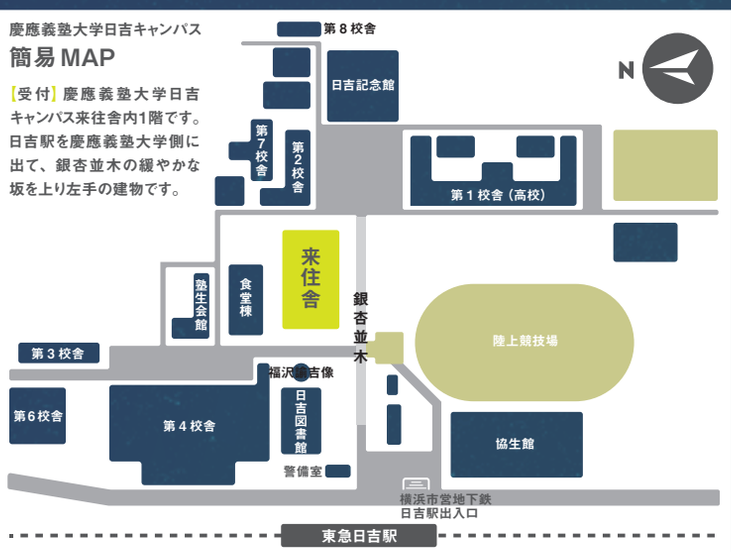
教養は近代以来、個人の自己理解と社会 ― もっといえば国民国家 ― とをつなぐ契機だった。まさにそれゆえ近代以降の教養は試練にさらされ、自己批評を求められ、その輪郭についての折衝のトポスとなる。これを教養の変貌と名づけよう。一方、会話中心の近代的リアリズム演劇ででもないかぎり、演劇は暗黙の知識を大幅に前提とする芸術ジャンルである。かつて演劇知とも呼ばれたこの種の「教養」は、上記の意味での教養の変貌とどう交わるのだろうか。この問題を、現代日本演劇の例や（可能なら SPAC の実践を取り上げたい）、また日本演劇学会における演劇と教養についての最近の言説をてがかりに考えてみたい。

佐藤康宏（美術史学会・東京大学教授）
「知識人の絵画ー南画とその享受者」

「琴棋書画」の語が示すとおり、中国の知識人にとって藝術が教養の一部であるのは古来当然だった。18 世紀、江戸時代中期以降には、中国における文人画のあり方に倣い、制作と鑑賞に中国的教養を必要とする南画と呼ばれる絵画が盛んになる。南画ではいかなる教養が示され、またどのような人々がそういう画家を支援し作品を求めたのか、池大雅、與謝蕪村、浦上玉堂、田能村竹田らの作例とその顧客について若干の検討を試みる。

慶應義塾大学日吉キャンパス
簡易 MAP

【受付】慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎内1階です。日吉駅を慶應義塾大学側に出て、銀杏並木の緩やかな坂を上り左手の建物です。



【交通アクセス】

日吉駅（東急東横線、東急目黒線 / 横浜市営地下鉄グリーンライン）**徒歩 1 分**

※東急東横線の特急は日吉駅に停車しません。関西方面からは新横浜駅下車、JR 横浜線で（1駅）菊名、東急東横線に乗り換え日吉駅下車が便利です。

東京駅	JR 山手線（渋谷・品川方面行き） 所要時間約 17 分	目黒駅	東急目黒線 所要時間約 17 分	日吉駅
新宿駅	JR 山手線（渋谷・品川方面行き） 所要時間約 7 分	渋谷駅	東急東横線 所要時間約 18 分	日吉駅
横浜駅	東急東横線 所要時間約 17 分			日吉駅

【問合せ】藝術学関連学会連合事務局
《Mail》geikanren_office@geiren.org《Fax》045-786-7883

小菅隼人（慶應義塾大学教養研究センター所長）| hamlet@keio.jp

【主催】藝術学関連学会連合 http://geiren.org
《参加学会｜意匠学会・国際浮世絵学会・東北芸術文化学会・東洋音楽学会・日本映像学会・日本演劇学会・日本音楽学会・日本デザイン学会・比較舞踊学会・美学会・美術科教育学会・美術史学会・広島芸術学会・服飾美学会・舞踊学会（50 音順）》
【共催】慶應義塾大学教養研究センター